

2000年度卒業論文要旨

まち・ひと・アイデンティティ  
——アメリカ合衆国における中国系移民の事例から——

安養寺 智

中国系移民の多くは安価な労働力としてアメリカ経済に貢献したが、後に「黄禍」として知られる中国人恐怖症により暴力と虐待の的にされた。こうして中国人たちは都市部に逃れ、チャイナタウンに身を寄せ合ってくるようになった。1880年代にかけて全米各地の大都市にチャイナタウンが形成されたのである。中国系の二世、三世は市民権を得ることはできたが、実際の日常生活において、完全なアメリカ人ではなく、あくまで「よそもの」として扱われた。ステレオタイプの「チャイニーズ」イメージにより、彼らの中の「アメリカ人」と「中国人」は相反するものとなり、アイデンティティが確立できないという心理的葛藤をうんだ。しかしながら現在では1965年の移民法改正以後、アジア・中南米系移民の大量流入による錯綜したエスニック集団間の関係性と

多文化主義原則の確立により、人々は状況に応じて動的なアイデンティティを構築するようになった。中国系アメリカ人のアイデンティティも「中国人かアメリカ人か」という二者択一や統一体の幻想から自由になり、様々なカテゴリーの絡んだアイデンティティを戦略的に使い分けている。今日のチャイナタウンは、「下町の中国人」にあって、生存戦略の場であると同時に、二世、三世層や専門技術をもった新移民たち「山の手の中国人」がエスニック・アイデンティティを滋養・確認する場所となっている。また観光地としてのチャイナタウンはエキゾチズムを商品化して提示する場であり、観光客の要求する「チャイニーズ」イメージを表装することで戦略的な空間として機能している。

ご当地ソングにおける地域イメージ——埼玉県を事例に——

池田 千恵子

ご当地ソングという言葉があるように、往年の歌謡曲の中には地名を歌詞に取り入れ、その地域のイメージを聴き手に伝え、多くの人々の共感を呼ぶことに成功した楽曲が多く存在している。このように「うた」と「地域」の関連は深いもの、ご当地ソングについての研究は非常に少ない。この論文では全国的に有名なご当地ソングを生み出していない歌謡曲寡少県である埼玉県を事例に、ご当地ソングに取り入れられた地域イメージを明らかにした。埼玉について歌った曲をレコード店店頭やインターネット等を利用し独自に採集し、その歌詞分析と歌手「さいたまんぞう」を初めとする埼玉のご当地ソングに携わる人々に直接インタビュー調査を行った。また県民性研究資料の分析と、県内の名所、地域イメージを探るアンケート調査を実施した。埼玉のうたを見ると、県内部

の人が作る楽曲では市町村に地域を限定し明確なイメージが形成されているものの、県外部の手による楽曲は埼玉を題材にしているがその地域イメージが終始曖昧なままである。県民性から探る地域イメージも特にはっきりしていないことがわかった。ご当地ソングにおいて明確な地域イメージが形成されていることが一番重要であり、埼玉が歌謡曲寡少県であるのは東京の陰に隠れ地域イメージを持っていないことが一番の要因である。しかし全国的に見ればご当地ソングを持っていない埼玉であるが、地域を限って見れば興味深い楽曲を生み出し続けている。2001年には「さいたま市」が制定され、県の新しい時代を迎えるにあたり、明確な地域イメージを打ち出すことが出来た時が、新しい埼玉のご当地ソング誕生の時である。